The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜資料紹介＞織田作之助全集未収録作品紹介（一）：「近頃大阪色」「禍なる哉長髪」 |
| Author(s) | 斎藤, 理生 |
| Citation | 阪大近代文学研究. 2017, 14-15, p. 96-102 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67761 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介（一）「近頃大阪色」「禍なる哉長髪」

斎藤 理生

## 一 一九四〇年の二つのコント

織田作之助が本格的な創作活動を行ったのは、一九三九年から一九四六年の間である。その約七年間は、戦中から敗戦直後という未曾有の混乱期でもあった。そのため作之助には、初出が不明の作品や、存在そのものが忘れられている作品が少なくない。ここに紹介する二つのコントも、発表された後、土方正巳『都新聞史』（日本図書センター、一九九一）で言及されていたものの、『定本織田作之助全集』全八巻（文泉堂出版、一九九五）はもちろん、大谷晃一『織田作之助――生き愛し書いた』（沖積舎、一九九八）、浦西和彦編『織田作之助文藝事典』（和泉書院、一九九二）、山内乾史「織田作之助著述一覧稿（Ⅰ）～（Ⅳ）」（「近代」一九九五・九～一九九七・三）、関根和行『増補版 資料織田作之助』（日本古書通信社、二〇一六）など、先学による年譜や著作目録でも取り上げられてこなかった作品である。

「近頃大阪色」は一九四〇年八月二四日付の「都新聞」第五面に「夕刊コント」として掲載された。「禍なる哉長髪」も、同年九月一八日付の「都新聞」第五面に「夕刊コント」として掲載された。以下がそれぞれの全文である（旧字は新字に改め、ルビは省略した）。

近頃大阪色

織田作之助

近頃大阪の町を歩いて間誤つかなかつたためしはない。いちいち挙げるのも今更めくが、たとへばデパートの食堂へ行くと、これが我日本の食物かと暫時思案に暮るや

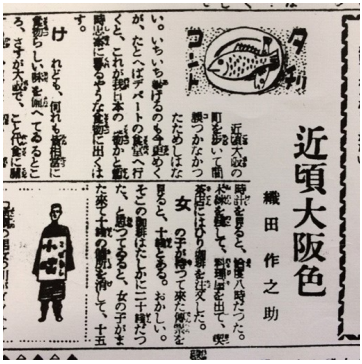
うな食物に出くはす。

けれども、何れも皆相当に食物らしい味を備へてゐるところ、さすが大阪で、こと代食に関する限り、東京など遙かに大阪の後塵を拝してゐるのだと感心して、僅に心を慰めてゐる。

ある料理屋で天麩羅丼を喰べてゐると、女給仕がつかつかと傍へ寄つて来たかと思ふと、物も言はずにいきなり私の丼を取り上げて行き、それはもうあつといふ間の早業で、何すんねん、未だ喰べさしやぜと言ふ暇も与へなかつた。あつと驚いたが、しかし待て、時計を見ると、恰度八時だつた。未練を残して、料理屋を出て、喫茶店にはひり珈琲を注文した。

女の子が持つて来た伝票を見ると、十銭とある。おかしい。そこの珈琲はたしかに二十銭だつた、と思つてゐると、女の子がまた来て十銭の個所を消して、十五銭とする。ところが、十分ほどすると、また来て、もとの十銭と変更する。間誤つかざるを得ない。呆然としたが、あとで分つた。すなはち、その日大阪では飲物類の最高価格が決定したが、それが何しろお役所の仕事で、たとへば珈琲を十五銭にしたものか十銭にしたものか、ちよつと分らぬやうなやゝこしさであつたから、喫茶店の主人はおろおろと迷つてゐたのだつた。

土砂降りの雨が降つて来たが、自動車はない。雨の中をうろうろ濡て歩いてゐると、乗らんかと声掛けられて、見ると人力車だつた。値と行先をきめ、やがてよちよちと人力車は走り出した。知人の家に着くと、近所の人々が傘さして誰ぞ悪おまんのんかと、集まつて来た。私は医者と間違へられたのである。


近頃大阪色

織田作之助

近頃大阪の時計を見ると、恰度八時だつた。町を歩いて間もなく珈琲を出て、喫茶店にはひり珈琲を注文した。

女の子が持つて来た伝票を見ると、十銭とある。おかしい。そこの珈琲はたしかに二十銭だつたと、これが御日本の「都」かと疑つた、と思つてゐると、女の子がまた来て十銭の個所を消して、十五銭とする。

けれども、何れも皆相当に食物らしい味を備へてゐるところ、さすが大阪で、こと代食に関する

## 禍なる哉長髪

織田作之助

正月であるとか、友人の結婚式があるとか、余程さし迫つた事情のない限り、私は理髪店へ出向かない。生来の不精者であるのと、散髪をしてゐる時間が惜いのと、

そしてこれがいちばんの原因だがひとに頭を乱暴に弄れながら鏡と睨み合ひしてゐるのがいやであるからだ。

しかもその時間中、心にもない一寸した快感を感じなければならないのだから、一層いやに思ふ、若い女性が理髪店の回転椅子に身を固くして横たはつてゐる図は、考へたゞけでもぞつとする。

さういふ訳で私は年に四五回くらゐしか散髪をしない、おかげで散髪代はかなり節約出来、おまけに香油やチツクの類を使用しないから、化粧品代もゼロである。その代り、かなり目立つ長髪で、しばしば噺家かと誤解され、易者かと見損なはれる。

ある日、よくよくさし迫つて大阪ビルの理髪店へ行つた。ところが、ドアを押すなり、職人たちがいつせいに私の顔乃至頭を見て、お互何ごとか目くばせし、囁き合ふではないか。私は途端に自分のぼうぼうたる長髪を意識して大いに間誤つき赧くなつた。と同時に不愉快になつた。嗤ふな。長ければこそ短くしに来たのではないか。

椅子に掛けると、縁なし眼鏡を掛けたそこの主人らしき男が、かういふ長髪は時局柄いけません、うんと短くしなさいと、わざと標準語で、客である私に命令的にいひ、そして乱暴に刈りはじめて、あれよあれよと思つてゐるうちに私の頭を呉服屋の番頭めく頭に刈りあげてしまつた。きけば最近理髪業者の申合せで、長髪は強制的に短く刈つてしまふことにしたといふ。

それもまことに結構だが、しかしそれならば、何故チツクやポマードで固めあげたリーゼント型の髪を禁止しないのかと、私はふといひたくなつたが、いま鏡にうつつた呉服屋の番頭めく自分の頭をみては、ただただ揉手をしてへえ、さよか、と頭を下げるよりほかに致方なかつた。

## 二　二つのコントと同時代
### ――新聞記事を手がかりに

「近頃大阪色」と「禍なる哉長髪」は共に、時局を反映し

て変わりつつある町の様子や生活を、それに即応できない「私」を通じて滑稽に描いた作品である。

「近頃大阪色」の「私」は、「デパートの食堂へ行くと、これが我日本の食物かと暫時思索に暮るやうな食物に出くはす」とこぼしている。これは当時デパートの食堂で米食が禁止されていたからだと考えられる。一九四〇年七月一二日付「大阪朝日新聞」第七面には、「節米宣戦の布告　百貨店の食堂から「ご飯」締出し　料理、飲食店は時間制限　近畿六府県の申合せ」という記事が掲載されている(1)。

また、「私」は八時に食べかけの天麩羅丼を取り上げられてしまう。なぜ八時になると食べられなくなるのか。その事情も上記の新聞記事から推測できる。記事には「料理屋、支那料理店および一般飲食店は出前を含めて当分米食の販売時間を午前五時半から同七時半、午前十一時から午後一時半午後五時から同八時までの三回に制限する」と記されている。米食の販売時間が規制されていたのである。なお、同日の「大阪毎日新聞」にも「食堂や会合は　当分お米抜き　近畿六府　県の食料　報国進軍」という記事があり、同じ内容が記載されている。

さらに、喫茶店における珈琲の値段の混乱については、同年八月一八日付「大阪朝日新聞」の記事「幅を効かす半額飲物　けふから消えた贅沢味覚」に、「いよ〳〵十七日から菓子と嗜好飲料の公定価格が決定され」たとあり、「十七日左の通り告示、即日実施した」とされている価格の中に珈琲の値段も記載されている。そこでは「特殊飲食店」が一五銭で、「普通飲食店」が一〇銭となっている。「大阪毎日新聞」の同日の記事「コーヒー最高十五銭　アイスクリーム七銭　飲物の大阪値段決る」では店をAとBに分けており、Aが「カフェー、バーなど特殊飲食店の最高価格」で一五銭、Bが「席貸など特殊料理屋および普通料理屋、普通飲食店、貸座敷」などで一〇銭と記載されている。これらの曖昧な記載からは、区別がわかりにくかったケースが現実にあったことが推測される。

「禍なる哉長髪」については、一九四〇年九月八日付「朝日新聞（大阪）」第七面に、「男の軟派頭締め出し　床屋が〝この型以外はお断り〟」という記事が載っていることが注目される。「〝新体制はまづ頭髪から〟と大日本理容連盟ではさる六日大阪東区東小橋の同連盟事務局に全国代表者協議会をひらいた結果、男女とも新体制下にふさはしい簡素第一の標準頭髪型を作成、客から注文があつてもこの型以外の理容はうけつけないことに下相談ができ」たという内容で、「この結果男のくせにバラツと髪を前に垂らせば鼻や口の辺までくる男か女かわからぬ軟弱型のいはゆるリーゼントなどは手間もかゝり、チツク、ポマードなどの消費も多い非時局型であるといの一番に槍玉に上り全国一斉に廃止される」とあり、「禍なる哉長髪」で語られている内容と重なることが一目瞭

然である。

作之助はこの逸話を、後年『髪』（「オール読物」一九四五・一一）にも使っている。

ところが、間もなく変なことになつた。既に事変下で、新体制運動が行はれてゐたある日の新聞を見ると、政府は国民の頭髪の型を新体制型と称する何種類かの型に限定しようとしてゐるらしく、全国の理髪店はそれらの型に該当しない頭髪の客を断ることを申し合はせたといふのである。

私はことの意外に呆れてしまつたが、果して間もなくあるビルデイングの地下室にある理髪店へ行くと、金縁眼鏡をかけたそこの主人はあなたのやうな髪は時局柄不都合であると言つて、あれよあれよと驚いてゐる間に、私の頭を甲型か乙型か翼賛型か知らぬがとにかく呉服屋の番頭のやうな頭に刈り上げてしまつた。私は憤慨して、何が時局的に不都合であるか、むしろ人間の頭を一定の型に限定してしまはうとする精神こそ不都合ではないか、しかし言つて置くが、髪の型は変へることが出来ても、頭の型まで変へられぬぞと言つてやらうと思つたが、ふと鏡にうつつた呉服屋の番頭のやうな自分の頭を見ると、何故か意気地がなくなつてしまつて、はあさよかと不景気な声で呟くよりほかに言葉も出なかつた。

『髪』では理髪店の時局に即した方針をあらかじめ新聞で知ってはいたことになっている点など、わずかなちがいはある。しかし時局を理由に長髪を強制的に刈られてしまったという出来事はもちろん、反発を覚えたものの鏡に映った「呉服屋の番頭」のような自分の姿を見て意気消沈してしまうという筋において、両作品の一致は明らかであろう。

このように、世相を取り上げること、新聞記事を参照すること、一度用いた話を別の形で使うことなど、作之助が得意とした創作手法が、これらの作品からもうかがえるのである。

## 三　「都新聞」と織田作之助

作之助は翌一九四一年に、「都新聞」にたびたび随想を発表している。「大阪的」（二・一八）、「洒落」（六・二〇）、「大阪の性格」（七・一七～一八）である。今回紹介したコントは、それらに先駆けて発表された作品ということになる。

土方正巳『都新聞史』は、「用紙事情の悪化で朝刊演芸面のスペースが圧縮され、それを埋め合わすため、昭和十四年九月二日付け夕刊から第三面小説下に四段の娯楽欄を始めた」際に、「社会諷刺的なところを狙って、微笑ましいがピリリと辛い」ものとして「夕刊コント」が始められたことを社報のＰＲ記事を引用して紹介した上で、次のように記している。

「夕刊コント」には、徳川夢声、菊田一夫、高田保、藤浦洸、伊馬鵜平（春部）、乾信一郎、味岡敏雄（山沢種樹）、俳優の古川緑波、神田三朗ら、このほか南原四郎（潮田租）、阿部鞠也（中村完一）、南部僑一郎、時事川柳の丸山鉄雄、時事小唄の石田一松らが登場し、近藤日出造、中村篤九、富田英三ら漫画家の文章も多い。

なかでも、織田作之助作の「近頃大阪色」（昭和15年8月24付）、「禍なる哉長髪」（9月18日付）が異彩を放っている。文化部の頼尊清隆が旧制三高時代の友人という関係から原稿を頼んだのだと思うが、『文芸』七月号に代表作「夫婦善哉」を発表、新進作家として売り出す前のことである。

土方が推測しているように、まだ実績の乏しかった作之助に舞台が与えられたのには、「都新聞」記者の頼尊清隆の働きかけがあったことは想像に難くない。調査した範囲では、頼尊と「夕刊コント」と作之助との関係はわかっていない。しかし頼尊は『ある文芸記者の回想――戦中戦後の作家たち』（冬樹社、一九八一）で、作之助と「三高時分に一緒だった」ことを語っている。また、作之助の親友であった白崎礼三と親しかったこともわかる(2)。

作之助と頼尊との具体的な関係がうかがえるのは、「都新聞」の後継紙にあたる「東京新聞」時代、それも戦後になってからである。一九四六年、流行作家になりつつあった作之助は「東京新聞」文化部から連載小説の執筆を打診された。作之助は乗り気であった。しかし「東京新聞」の社長が文化部の意向に反対し、邦枝完二を強く推したことで、話はなくなってしまった。その経緯を、頼尊は作之助に、一九四六年九月一一日付書簡（大阪府立中之島図書館織田文庫所蔵）で説明している。もしこの話が進んでいたら、『土曜夫人』の発表媒体は「讀賣新聞」ではなかったかもしれない。

もっとも頼尊は、次の機会にも作之助や石川淳を推薦しようと計画していた。そのためには社長に作之助の存在を印象づけておく必要があると考え、同三〇日付の書簡（大阪府立中之島図書館織田文庫所蔵）では、随想を依頼している。これが「サルトルと秋声」（一九四六・一一・一七～一九）になった。

その翌々月に永眠してしまう作之助の創作が「東京新聞」に連載されることはなかった。ただ、一九四七年になって「東京新聞」に連載されたのが坂口安吾『花妖』（二・一八～五・八）であったことからも、頼尊がいち早く、この後「新戯作派」と呼ばれる作家たちに注目していたことがわかる。

## 四　時局との距離の取り方

一九四〇年八月から九月の織田作之助は、夕刊大阪新聞社

に勤めながら小説を書いている、七月に「文藝」賞を受賞したばかりの新人作家であった。まだ駆け出しの作家にとって、中央のマスメディアの期待に応えられる作品を書けるかどうかは、これから創作で生活を営んでゆこうとするにあたって、大きな試金石であったはずである。

八月下旬に「近頃大阪色」を発表したあと、九月中旬に「禍なる哉長髪」を書く機会を得られた事実は、作之助のコントが一定の価値を認められたことを示している。そしてこの体験は、戦時下から敗戦直後にかけて、創作を発表するスペースが極度に制限されるなかで、作之助が「大阪新聞」や「朝日新聞」「毎日新聞」などに、「けしつぶ小説」と呼ばれた小品を書く上でも、自信になったことであろう。

他方、過去の大阪を描いた「夫婦善哉」とちがい、「近頃」の大阪を描いた作品を書くにあたって、作之助は検閲の問題を無視できなかったはずである。最初の創作集『夫婦善哉』を創元社から刊行したのが八月一五日で、風俗問題により一部削除を命じられたのが一七日である。「近頃大阪色」はその一週間後に、「禍なる哉長髪」は一ヶ月後に発表された計算になる。土方前掲書によれば、二つのコントが発表された「都新聞」夕刊娯楽欄に掲載された六月四日付の「行き過ぎた話／井戸端の国策ごっこ」は「題名を残しただけで、全文削除となった」という。執筆前に、作之助にもその事実が伝えられていた可能性は低くない。

その意味で、ここに紹介した二つのコントは、小品ではあるが、作家は慎重に配慮しつつ書き進めていったと見るべきだろう。そして「禍なる哉長髪」の、時局を理由に勝手に頭髪を切られてしまい、抵抗感を覚えるものの結局なすがままになる「私」の姿には、作品本文を切り取られてしまった作之助の時局との距離の取り方が反映されているようにも読めるのである。

**注**

（1）織田作之助がこの時期「大阪朝日新聞」を読んでいたのは確実である。一九四〇年六月一三・一四日に、同紙に随想「小説の思想」を発表しているからである。また、当時の作之助は夕刊大阪新聞社の記者でもあった。職務上の必要からも「大阪毎日新聞」など他紙を含めて、当時大阪で手にすることができた多くの新聞に目を通していた可能性が高い。

（2）「坂口安吾さんと私」（「アートシアター」一九七七・三）→『坂口安吾全集別巻』（筑摩書房、二〇一二）

（さいとうまさお／本学准教授）